Jaoニュース

４１１号　２０２６年２月

発　行　じゃおクラブ
責任者　大澤　輝之
編　集　事務局
URL　https://jaoclub.com

事務局だより

会員動向（2026 年 1 月 1 日現在）

地域	湘南	県央	ベイサイド	多摩・田園	全体
会員数	37 名	31 名	28 名	28 名	124 名

E グループ会員は会員数 124 名のうち 114 名。

入会：1 名　宮代 雅夫氏（湘南）　　退会：なし

じゃおニュースの「サークルスクエア移転担当（仮称）」を設立します

前回（11 月 16 日）の運営委員会にて、『じゃおニュース』を 2026 年 4 月を目標に、掲載場所をホームページからサークルスクエアへ移転することが基本方針として決定されました。

今回の運営委員会（1 月 18 日）では移転について協議した結果、移転計画の立案と実施を担当するチームを設立したほうがよい、という結論に至りました。

「サークルスクエア移転担当（仮称）」の概要は以下のとおりです。

① 会則第 28 条に定める専門部会として設立し、運営委員会から権限移譲を受けます。
② 移転計画の立案と実施を担当します。
③ サークルスクエアの普及策も検討・実施します。
④ メンバーは、運営委員より 2 名、地域じゃおより 8 名程度を予定しています。
⑤ メンバーを公募します。ご希望の方は竹内委員までお知らせください。
⑥ 今後、各地域の世話人会にて運営委員より詳しく説明します。

第 35 回通常総会は 5 月 24 日（日）に開催する予定です

じゃおクラブ第 35 回通常総会は、5 月 24 日（日）にオルタ館にて、対面で開催する予定です。

総会は、地域じゃおを超えて会員が交流できる数少ない機会です。顔を合わせて語り合いましょう。ぜひ多くの会員の皆様にご出席・ご審議をいただき、会員相互の交流を深めていただければ幸いです。

総会終了後には、会費制にてささやかな懇親会を行う予定です。詳細は後日連絡いたします。

全会員に配布する会員名簿に記載する個人情報について

2025 年度より、総会に合わせて全会員に配布する会員名簿には、次の情報のみを記載しています。

① 氏名
② 所属する地域じゃお
③ メールアドレス
④ 携帯電話（ない場合は固定電話）

これは、近年増加する特殊詐欺や強盗などへの対策として、個人情報のセキュリティ強化を目的に変更したものです。ご不便もあるかとは存じますが、リスク対策ですので、ご理解をお願いします。

なお、すべての情報を記載した会員名簿は、従来どおり月初に、運営委員・監事・地域じゃお名簿管理担当者に配布しています。「会員の住所を知りたい」などのご要望がありましたら、地域の運営委員、または名簿担当者にご連絡ください。（本件は 1 月の運営委員会で方針継続が再確認されました。）

次回予定

運営委員会：2026 年 3 月 15 日（日）10:00～12:00（オンライン開催）
議長：高橋委員　　書記：竹内委員

HP サークル：2026 年 2 月 8 日（日）15:30～17:00（オンライン開催）
議長：竹内委員

会員だより

僕の読書感想文

県央　別所 洋一

本の雑誌血風録　椎名誠、本の雑誌風雲録　目黒考二、別人「群ようこ」のできるまで　群ようこ、町田絵日記　沢野ひとし。目黒考二の手紙から始まったコピーが 3 人に 11 人に 30 人に、そして読書ジャーナル（年間千円)、目黒ジャーナルになり、椎名と目黒がそれぞれ 20 万か 10 万出して本の雑誌 500 部百円（原価 340 円）となった。

2 号 1,000 部、3 号、200 円 1,500 部、5 号 4,000 部、6 号 5,000 部、8 号 8,000 部、10 号 10,000 部に成長。2 人で書店を回って置いてもらった。

事務所を借り、電話番に椎名が働いていたストアーズ社の採用試験に来た女性を雇った。電話もかかってこず、編物ばかりしていた。

これが後の群ようこで、ペンネームは目黒が自分につけていた群一郎、北上次郎～車十郎から目黒がつけた。椎名の面接を受け、緊張して飲めないワインを飲んでしまい、ひどい目に会ったと書いている。

群ようこへの原稿依頼が増え、本の雑誌社の勤務時間外に書いていたのだが寝る暇がなくなり退社。書店への配本も 2 人だけでは不可能になり本の雑誌に配本の助っ人募集の広告を出した。

バイト代が払えなかったので無給の配達部隊が誕生した。本の雑誌のイラスト担当は沢野ひとし、椎名は「わに目の画伯」と呼んでいる。

季刊「まちびと」に町田絵日記を 2020 夏号から 4 回に渡って書いている。自宅は薬師池公園まで 20 分の所にある。

町田に住んで 50 年が過ぎ去ろうとしている。職場が都内にあった頃は通勤時間に不便を感じていたが、今では駅までのバスの本数も増え、さらに小田急線の快速急行も増大し、都心に出るのも、いたって便利になった。

結婚して都営住宅が偶然に当たり、娘が小学生、自分が 29 歳の時にこの地に引っ越してきた。当時は小田急線は「新原町田」横浜線の町田駅は「原町田」と呼ばれていた。

木造駅舎はひと昔前の単線の雰囲気で辺りはまだ戦後の「訳あり」の面影が残っていた。

ぜんぶ馬の話　木下順二、ぜんぶ落語の話　矢野誠一、ぜんぶうそ　三遊亭円歌、ぜんぶ馬の話のもじりと矢野誠一は書いている。

もじり・・俗曲なのでもとの表現を変えて滑稽または寓意的にしたもの。
地口・・ことわざ、成句と似た発音の文句を作って言うしゃれ。
しゃれ（洒落）・・（言葉の同音を利用して）人を笑わせる気の利いた文句。

宇江差真理→ウェザーレポート、逢坂剛→剛爺コーナー、開口健→開口一番、蔦屋重三郎の狂歌名　蔦唐丸（つたのからまる）学生時代か、人類皆兄弟→ビン類皆ちょうだい（井上ひさし）、贅沢は敵だ→贅沢は素敵だ、若さと美ぼう→バカさと貧乏、親孝行したいときに親はなし→親孝行したくないのに親がいる、小説新潮→剽窃新潮、もじりとか粋だね。オサレだね。

佐伯泰英、スペインで闘牛写真を撮っていた。色々な小説を書くが売れず、編集者にもう時代小説か官能小説しか残っていないと言われ、文庫書き下ろし時代小説一本に絞った。

「惜樑荘だより」熱海の岩波茂雄の別荘「惜樑荘」設計吉田五十八（太田胃散の創業者太田信義の 5 男）を買い、完全修復、番人と称して住み、借金返済の為、毎日書きまくった。

作家は家を建て、編集者は腹を立てる。幻冬舎の見城徹、「ご立派すぎて」の鈴木輝一郎、桜木紫乃、北大路公子が語る編集者と作家のやりとりが面白い。

本の宣伝がうますぎて、本の中身が劣るのが少し寂しい。最近の心境としては、「中高年夢ない希望ない歯もない、毛もない、先もない」綾小路きみまろ。

「親もなく妻もなく子もなく版木なし金もなければ死にたくもなし」林子平（六無斎）憎まれてながらふる人冬の蠅。宝井其角　長らえてわれもこの世の冬の蠅　永井荷風、ぜんぶパクリでした。

御退屈様

移住の記－その 6

佐賀県小城（おぎ）市小城町　（県央）前田 康行

コロナ禍以降リモートワークが一般化するにつれ、都会から地方への移住が話題に上るようになってきたみたいですね。毎日のきつい電車通勤なんかを思うと在宅勤務はほんと楽でいいですよねえ。

在宅で仕事できるならなにも都会にいなくてもいいかなという気持ちもわかります。さらに現役世代に限らず、都会の喧騒から逃れて静かな田舎でのんびりと暮らしたいとか、海が見えるところに住みた

い、などの理由で移住をしたという、リタイアした中高年の方の記事を時々ネットで見ることがあります。

午前中は近くの海や川で魚釣りしたり自家菜園で畑仕事、午後はのどかな風景を眺めながらコーヒータイム、なんていう生活を思い描くと、田舎暮らしっていいなあって憧れますよね。ただ一方で、移住された方の中には、理想と現実との違いに戸惑い、こんなはずじゃなかったと失望されて都会に戻られる方も結構おられるのだとか。

かくいう私の移住生活はどうなんだろう。今のところは毎日朝 10 時から午後 3 時過ぎぐらいまで仕事してますが、それ以外の時間は自由でして、仕事から帰ってからでも畑仕事は楽しめますし、気分が乗れば釣り（ただし、川でハヤ釣り）なんかもできます。

夕方には玄関先に椅子を出し、目の前に広がる田園風景を眺めながら🍺を飲むなんていうね、まあ快適といえば快適な生活ですかね。あ、そういえば、昨年夏の夕方、例によって玄関先で🍺飲んでたら、アナグマちゃんが通りかかりましてね、なかなかかわいらしかったですよ。

家の裏が山ですし、まあそういうところです。ただですねえ、昨今の夏の暑さでは、午後の畑仕事、魚釣りなどは無理。冬は日が短いし、寒い中畑仕事っていうのもねえ。快適なのは都会とおなじで春と秋だけですよ。

また、田舎暮らしは生活費が安いと思っている方がいらっしゃるかもしれませんが、そんなことはなくて、近隣のスーパーより相模原の OK ストアの方が安いぐらいです。米どころ佐賀であるにも関わらず、新米はこのところずっと 5 kg 4500 円前後。

公共交通機関が貧弱ですから車は必需品で、当然車関連の出費が嵩みます。もちろんガソリンの値段も都会と同じです。

水道光熱費なんて、むしろ田舎は人口減で需要が減ってきるので上下水道の料金が値上がり傾向です。古い家を買い取って住み始めましたが、厳しい住環境のため結局建て替えましたんで老後資金がなくなりました。

また、移住者の声でよく聞かれるのが、田舎の人間関係とか風習とかになじめなくて結果的に孤立してしまう、といったようなことだとか。まあ、わからないでもありません。

私の場合は、移住とはいえ帰郷みたいなものですから、言葉は 100%わかりますし、この地の慣習、風習といったことはだいたい理解できますが、まったくの知らない土地だとしたら、どうにも馴染めないってこともあるでしょうね。リタイアして、自由気ままに暮らしたいと思って移住してきたのに、けっこう周りの人間関係に煩わされてしまうなんてことも。

まあ、そんなこんなも含めてまるごと受け入れることが肝要でしょうかね。あるいは、どうしても馴染めないという方は、その土地で移住者同士のコミュニティーを作るとか。

いずれにしても先の短い高齢者は日々楽しく余生を送りたいものです。

写真左：アナグマ、日本固有種。

人間が近づいてもすぐに威嚇したり慌てて逃げたりせず、落ち着いていることが多い、そうです。確かに逃げたりせず、立ち止まってじーっとこちらを見たあと、悠然と去っていきました。

じゃお県央

2026 年 1 月定例そば打ち開催報告

【日時】 2026 年 1 月 19 日（月）9 時 30 分～13 時 30 分
【場所】 海老名市国分コミセン 多目的室

2026 年新春そば打ちを、1 月 19 日に海老名市国分コミセンにて、多摩・田園の浅野さんのご指導のもと、9 名で開催しました。

今回は皆さんの要望により、温かい掛け蕎麦とざるそばを作ることにしました。

9 時半に開館した調理室で準備を開始しました。4 つのテーブルを効率よく使い、そば打ちを始めました。

途中、浅野さんからのご指導で水を足したり、そば粉を足したりしながら、練り具合の硬さの感覚を確認しつつ次工程へ進みました。ようやく 11 時半には、蕎麦切りまで終えることができました。

蕎麦づくりと並行して、薬味づくり（大根おろし、山芋おろし）、湯沸かし、鍋・皿などの準備も行いました。鍋、ざる、大皿・小皿、お椀、箸などの備品をたくさん使用するため、後片付けが大変でした。

11 時半頃から茹で始め、茹でる→水洗い→冷水でしめる、の作業を経て大皿に盛り付け、ざるそば用と掛け蕎麦用に分けて試食しました。温かい掛け蕎麦は評判が良く、瞬く間になくなりました。次回も温かい掛け蕎麦を作りたいと思います。

前回製作して不具合があったのし板も、加藤さんが修正してくださり、問題なく使用できました。

現在、そば打ち道具は 4 セット（個人私物も含む）になりました。

今回、大場さんから長芋、小林さんから大根、坂井さんから特製のそばつゆ、浅野さんから七味唐辛子の差し入れがありました。ありがたく皆さんでいただきました。

【参加者】 鈴木（寿）、坂井、大場、加藤、新井、山口、小林、福山、浅野（多摩・田園）計 9 名
【次回】 2026 年 3 月 16 日（月）9:30～13:00

（県央　福山 信二 記・福山 信二／加藤 満　写真）

じゃおベイサイド

オルタ館フェスタ 40 に参加

生活クラブ生活協同組合のオルタナティブ館が開館して 40 年。記念して「オルタ館フェスタ 40」が 12 月 6 日（土）開催されました。

じゃおクラブも 1991 年設立以来、館の 4 階に机 1 台ではあるが事務局を置き、活動の拠点としました。毎月の運営委員会、講師を招いての講演会、会員の交流を図るサロン（勿論飲み物歓迎）等会議室を活用しましたが、近年コロナ流行で会議も講演会もリモートとなり、利用も激変しました。遂に事務局は撤退の憂き目となりました。

（じゃおクラブの所在地を訪ねると倉庫に資料などの保管の棚 1 台、なんだかサギグループみたい。）

それはさておき健康な生活や豊かな文化を発信し続けるオルタ館のフェスタ、生協の生産者の消費財の販売やカルチャースクールの講演、展示など盛りだくさん。これにはベイサイドも参加して活動をアピールしなくては。

今回はじゃおだけ一室を使用出来た。少しマンネリではあるが、手作りの子供の遊び「万華鏡・ＣＤこま・紙トンボ」の工作コーナー。じっくり出来るぞ。

万華鏡はこんな綺麗なものが自分に出来るのか、セロテープが貼れるのか心配そうな顔、出来上がった時に満足げな歓声とママに見せた自分が作ったんだぞという得意げな顔。（手伝ったんだぞ）

ＣＤこまの盤面に渦巻き模様、線の色を塗る。「この線からはみ出さないようにね。ここはこの色、こっちはこの色」と教えたのに勝手に自分の好きな色や線を引っ張る「なんだこのクソガキ」なんて思っちゃいけない、回してみると「ええっ」「おお」綺麗な色や線になってるんです。大人の固定観念じゃない子供の自由な感覚で新しいものが出来たのです。教えられたのです。難しい理屈を言う大人より子供たち相手の方がいいな。

今年も入場者が少なかった感じだ。少子化の影響かな。

（ベイサイド　率川 清昭　記・土屋 佳一　写真）

ベイサイド新年会

ベイサイド 2026 年度の新年会、1 月 19 日に磯子の中華料理店「醇華園」で開催しました。

14 名の参加予定が直前に 12 名になりましたが、日頃顔を合わせることの少なくなった会員の皆さんの元気な顔を見ることができました。

今回は、中華料理店の近くのマンション居住者が 4 名であることから磯子を選びましたが、マンションからは 1 名しか参加できなくなってしまいアレレ！また、開始時間の 11 時 30 分になっても一人の方が現れません。

あわてて電話をしたところ、「今、家にいますが何かありましたか？？」との返事。

11:30 を 13:00 と間違えていたとのこと。なるほど、11:30 の ’13’ の部分が記憶に残ったようです。

記憶力はまだ衰えていません！！　幸い中華料理店から近い所であったため、何とか 30 分遅れで到着。何よりもご無事でよかった。

参加者の平均年齢が 80 歳を超えていることを思えば、皆さん無事集まれただけでも上出来、それにしても参加の皆さん元気です。今年も明るくおおらかに行き（生き）ましょう。

宴はビールをこよなく愛する会員の音頭でまず乾杯。前菜の盛り合わせが終わり、スブタが出てくるあたりで早くもお酒コール。中華といえば紹興酒、ベイサイドの「タニマチ」を名乗る方の厚意で最初の 1 本は 10 年物のボトルを奮発。各人のグラスに 1、2 杯ほど回ったところでボトルは空、蒸発が早い！

いつもは、予算の都合上 2 本目以降はレベルをぐっと下げるのですが、全員まだしっかりしていて、「今のはおいしかった」とお替りの催促。幹事も新年会で気が大きくなり、ついついイケイケムード、知らぬ間に 4 本が空いていました。

12 名でしたので、円卓にギリギリ座ることができ、和やかな雰囲気の中で会は進みました。話題はスポーツから昨今の政治、世界情勢、じゃおの現状、果ては「自称：琉球王朝の末裔」談義と広範囲にわたり、あっという間に 2 時間が過ぎてしまいました。最後に、今年一年も明るく元気に過ごすことができるようにと願ってお開きとなりました。

会員の皆さんが気楽に参加できる企画が少なくなり、人と人のふれあいが希薄になってきました。これからは折に触れ、このように人と人がリアルで会話を楽しめる、気楽な会が必要と改めて感じました。

―――　いつまでも「好奇」高齢者でいたいものです！！　―――

（ベイサイド　諏訪　記・写真）

じゃお多摩・田園

寒さを避けて「えのすい」へ ——1月グラファーズ撮影会

1月7日、グラファーズは新江ノ島水族館（えのすい）で撮影会を行いました。参加は5名。もともとは三渓園へ行く予定でしたが、寒中であることを考慮し、相談の上、屋内に切り替えました。

当日は10時半に小田急江ノ島線「片瀬江ノ島」駅集合。この日は曇りで最高気温が7℃と冷え込みましたが、館内は暖かく「屋内にして良かった」という声も出ました。

入館料は「大人の休日倶楽部」の特別優待で、大人2,800円が2,400円。水族館は入館料が高めになりがちですが、今回はお得に楽しめました。

水族館の撮影では、被写体によってカメラの設定を細かに変える必要があります。まず、水槽内は暗いので明るく写すための設定が必要です。また、ガラス越しの反射を避ける工夫や、水槽を通してくる光が歪むことも考えなくてはなりません。イルカショーでは一瞬を逃さないために何枚も続けて撮ります。

撮影を終えた後「今日は取れ高が少ない」という声が出ました。これは水族館撮影あるあるです。この日の苦労が、必ず次の撮影に生きてきます。

相模湾大水槽で行われるダイビングショー「フィンズ」は、スタッフが水中から魚たちを紹介してくれる人気プログラムです。水中カメラで「日中は隠れて見えない魚」まで見せてくれ、子どもたちが集まるのも納得でした。

イルカショーへは、開始ギリギリにスタジアムへ。前方は満席で後方席になりましたが、ジャンプのしぶきがかからないので「結果オーライ」だったかもしれません。

えのすい名物、クラゲファンタジーホールは、クラゲが「ふわりと漂う世界」を演出しています。照明を受けて、クラゲがゆらゆらと漂う姿は幻想的でした。

このほか、相模湾の特産「シラス」を生きた姿で常設展示する「シラスサイエンス」や、カサゴ、カクレクマノミなど、各自が気に入った被写体を追い、思い思いに撮影を楽しみました。

最後は藤沢へ移動し、駅前の居酒屋で反省会（という名の飲み会）。いつもの癖で冷えた生ビールを注文したら、冷えた身体には冷たすぎて、あわてて熱燗に切り替えました。この日は熱燗が進み、寒かった一日を暖かく締めくくりました。

（多摩・田園　竹内 純一　記・写真）

クラシック・コンサート鑑賞会

～さがみはらフィルハーモニー管弦楽団 第 51 回定期演奏会～

1 月 24 日（土)、橋本の「ほねごり杜のホールはしもと」(535 席）で、さがみはらフィルハーモニー管弦楽団の第 51 回定期演奏会を鑑賞しました。参加は 10 名。1999 年創立の地域密着のアマチュア楽団ですが、この日も満席で、キャンセル待ちも多かったようです。地元から支持されている楽団であることを実感しました。会場が駅直結で移動が短く、寒い時期でも負担が少ないのも、私たちにはありがたい点でした。

開演前のプレコンサートでは、ハイドンの弦楽四重奏曲第 67 番ニ長調「ひばり」から第 1・第 4 楽章が披露されました。早めに入場した人への嬉しいサービスでした。

本編は指揮・湯川紘惠さんのもと、ベートーヴェン「プロメテウスの創造物」序曲、モーツァルト交響曲第 40 番（クラリネットを加えた改訂版)、ベートーヴェン交響曲第 2 番というプログラム。

特に交響曲第 2 番は、9 曲の中では演奏機会が多いとは言えない作品です。鑑賞前に、チケットをお世話いただいた団員の方から「ヴァイオリンの演奏はとても難しい」と聞いていました。実際に聴くとテンポの変化が激しく、それに合わせる技巧が感じられました。今回は 1 階席中ほどの中央席を確保でき、ホールの音響も相まって、弦と管の受け渡しが明瞭に聴こえたのが印象的です。

アンコールは「プロメテウスの創造物」よりフィナーレ。晴れやかな曲で、最後まで楽しく過ごせました。身近な場所でこうした演奏に触れられることは、嬉しいことです。

今回は特別ゲストで東北大学の伊藤文人先生にご参加いただきました。伊藤先生は、じゃおクラブと同様「高齢男性の居場所づくり」に取り組んでおられる方です。コンサート終了後に、有志で意見交換会を行いましたので、次ページにレポートします。(写真：後列右端が伊藤先生)

（多摩・田園　竹内 純一 記・写真）

伊藤先生との意見交換会

伊藤先生との意見交換会には、じゃおクラブより 7 名が参加しました。

先生が取り組んでおられるメンズ・シェッドは 1990 年代にオーストラリアで生まれた高齢男性の居場所づくりの取り組みです。

メンズ・シェッド（Men‘s Shed）は、直訳すると「男たちの小屋」となりますが、日本では“大人の秘密基地”とでも解釈したほうが実際に近いかもしれません。男たちが集まって好きなことをしながら自分たちの居場所を作り上げています。様々なメンズ・シェッドが独自性を持ち、自由な活動を繰り広げているそうです。オーストラリアやイギリスで広がりを見せています。日本においては、内閣府に、孤独・孤立対策推進室が設置され、司令塔となって孤独・孤立対策が推進されています。

先生は、これまで、札幌の「札幌メンズ・シェッド・ポッケコタン」や大分県水上村の「寄郎屋」などと深くかかわってこられました。日本コミュニティー・シェッド協会を設立されており、運営ノウハウの共有や手引書の整備など、活動を継続・拡大するための基盤づくりを進めていることをご紹介いただきました。

この日は、お互いの活動概要の紹介から始まり、“高齢男性の居場所づくり”に関わる立場から、その意義や、クラブ運営上の課題などを話し合いました。

伊藤先生のお話で印象に残ったのは、高齢男性は、定年を機にそれまで働いてきた環境を失い、人間関係が切れてしまうことがあり、地域にも溶け込めずに、社会的な孤独・孤立に陥ってしまう、という問題意識でした。

一般に、社会的孤立が、様々な不健康状態と関連することが知られているそうで、社会的孤立は認知機能低下や認知症発症のリスク因子であるとされているそうです。高齢者においては女性より男性のほうが社会的孤立に陥りやすいそうで、高齢男性に“気負わず集える場”を用意することが孤独・孤立の一次予防になり得る、という考え方でした。じゃおクラブの理念と共通するものがあると感じました。

後半には、私たちが日頃感じている課題も率直に取り上げました。クラブ内で進行する高齢化に伴う運営のなり手不足、もめごと処理、女性参加をどう考えるか、男性だけの集まりが誤解されやすい点などです。伊藤先生からも「同様の悩みを抱えていた」との共有があり、課題が共通していることが確認できました。

今回は初の意見交換会でしたが、何よりの収穫は、日本全国に同じ目的で活動する仲間がいることがわかった点です。“高齢男性の居場所づくり”というテーマは、決して特別な話ではなく、国をあげて取り組もうとしていること、各地で同じ問題意識を持つ仲間たちがいることが分かり、心強く感じました。

ご参考として「札幌メンズ・シェッド・ポッケコタン」のテレビ取材番組（HTB 北海道テレビ）をご覧ください。

https://www.youtube.com/watch?v=MNMtLSg6vsc

（多摩・田園　竹内 純一 記）